

185

こんにちは。塾長の大井です。

前回のつづきです。

文章を理解する技術が上がり論理がつかめるようになれば、本文から離れずに読むことが可能になります。

ではそれで国語の力が上がったかという、それは入り口に過ぎません。

論理をつかむことで説明文は読めても、物語文は読めないままです。

そこで鍵となるのが国語の「もう一つの理」、つまり心理です。これこそが国語の出来を決定的に分ける大きな分岐点です。

どんな思考的秀才でも、算数の神童でも、心情の読解はからっきしダメという子はいくらでもいます。

なぜなら心は、目に見えるものでもなく、頭で考えて分かるものでもないからです。

人は幼いうちは、自分だけの世界で生きていきます。

そこで人(幼児期の子ども)は与えられ守られ、自分の感情の流れや

快不快のまま振舞うことが、ある程度許されます。

しかし成長するにつれて、生きていくことは他者との交わりの中で営まれていくことに気づいていきます。

そしてその他者と交わる中で、自分と背景や性格や価値観の異なる者に対する想像力が求められていきます。

この想像力を育むことこそが国語を育てることであり、それは子ども自身を育てることと同義なのです。

私は論理を明確に見せる一方で、そんな人間の心理を見せて(橋渡しして)いきます。

人の切なさ、葛藤、喜び。

人が生きていくことの不思議さやあたたかさ。

時に朗読し、時に演じ、時に例を挙げながら、そこにもう一つの現実を立ち上らせていくのです。

彼らが肌で感じられるように。

彼らの心に確かな波紋が起こるように。

子どもたちはそんな論理を超えた空気を体感し、やがて自分の実感へと昇華させていきます。

そうして、子どもたちは大井語を解する(コピーではなく実感として)ようになり、そこから自分のアンテナや他者を解する間口を広げていくのです。

(次回につづく)

2018年5月14日

大井雄之